は左の通りであつた。

香合　乾山松の繪　羽箒　大鳥　炭斗　唐物圓座
灰器　南蠻〆切　水指　青磁酒會　茶入　志戸呂廣口
茶碗　青井戸銘雲井　替　祥瑞香在銘　茶杓　空中共筒
茶　白昔　菓子　峰の光及び吹寄　菓子器　春星花鳥彫盆

以上列品中には得意先の拜借品もあるらしいが、兎に角向鉢卷で荷ぎ出した御輿の光は鷹峰の一方に輝き渡つて、東都三大道具商の面目玉を踏み潰さなかつただけが大成功と云はずばなるまい、今年より光悅會も法人組織と成り、會員誘引の臨時入場者より金五圓を徵收する事に爲つたが、數寄者の數は年々に增加して、二十三日には目白押の雜沓、早朝より薄暮まで繼續したさうで、來年よりは更に人數を限るか若くは誘引者の入場料を引上ぐるか、兎に角何等かの減員策を講ぜねばならぬと云ふのは、光悅會が年々彌榮えに榮え行く盛況を示す者で誠に目出たき限りである、來年は大阪の村山氏、東京の馬越氏に白羽の矢を立てゝ、一席引受を會員一同より懇望する筈であるさうだが、兩家に於ても是れは何卒承諾ありたく、幸に其承諾を得ば壬戌光悅會も亦必ずや大盛況を呈するであらうと、鬼に笑はるゝ事も打忘れて幹部連は早や頻に來年の趣向を凝らし居るさうだ。

五

今年の光悅會には非常に貴重で又有益な景物があつた、景物と云ふのもチト勿體ないやうだが、夫れは光悅會の爲めに東寺が帝室博物館の一室と東寺自身の書院と二箇所に、其什寶を陳列して特に光悅會員に展示し、博物館の方だけは併せて公衆の縱覽にも供された、是れは光悅會員中に兼ねて東寺の什寶を拜觀したいと希望する者があつたので、同寺の役僧と懇親なる土橋嘉兵衞老が斡旋して、今年の光悅會期に二日間東寺の什寶陳列會を開く事となつたのである、而して帝室博物館內の陳列は、豫て東寺より同館に寄託中の國寶を悉く一室に集合したので、好古家に對して比較研究上最も有益なる便宜を與へたが、列品中に就き眞言七祖像は、七幅の內五幅は唐の李紳の筆、又龍猛龍智二幅は弘法大師の筆と言ひ傳へられてある非常なる大幅で、

七祖の肖像の周圍に梵字若くは飛白文字が書かれてあるが、是れは啻に眞言宗に於て貴重なるばかりでなく、祖師肖像畫としては、時代に於ても技巧に於ても最も稀有なる者であるさうだ、此外佛畫にあつては珍海筆妙見菩薩像、宅磨勝賀筆十二天像等が最も大作と稱せられ、什器にあつては黃銅鈴、九鈷杵、鉦鼓若くは舞樂面等が一段優れて見受けられたが、何時見ても頭の下るのは弘法大師の消息卽ち風信狀の一卷である、此一卷は第一九月十一日附、東嶺金蘭(傳敎大師)に與へたもの、第二九月十三日附宛名のなきもの、第三九月五日附止觀座主(傳敎大師)に與へたもので、最初の消息の書出しに風信の文字があるので、世に之を風信狀と稱へて居る、文字は徑一寸許りで、何れも餘り長い手簡ではないが、其筆法の淸健典雅なる王羲之其儘である、中に處々にチラ〳〵と大師樣の見ゆるのが面白く、現世に弘法大師の肉筆と云はるゝ者は少くないが、是れは傳敎大師に送つた手簡で、叡山の延曆寺にあるべき者が何時か東寺に轉傳した者であつて、實に大師筆跡中の壓卷と謂ふべき者であらう、又東寺の方に飾られた國寶は約十五點の中、殊に珍らしいのは健陀穀子袈裟箱と云ふ黑塗蒔繪箱で、是れは大師時代の製作と覺しく、蒔繪の最初期に屬する者である、又傳弘法大師筆と云ふ十二天像は、藤原初期の名畫で幅四尺長さ之に適つた大幅であるが、十二幅中水天の一幅の如き其描寫の優麗高雅なる、日本古佛畫中屈指の名品と思はれた、斯くて東寺が光悅會の爲めに二箇所に什寶展覽會を開かれたのは同會に取りて非常の光榮で、會員の悅びは言ふまでもなく、光悅も地下で定めて有難く感謝した事であらう、兎に角是れは光悅會開創以來前例のない出來事であるから、辛酉光悅會に特筆大書して置かねばなるまい。

（大正十年十一月二十四日）

鹿ヶ谷茶會

一

黃花紅葉の好時節たる十一月を通じて、京都では東山大茶會に引續ぎて光悅會あり、茶人は茶に醉ふて一年の行樂唯此時と打興じつゝあつた其一方に於て、大阪の網島では藤田江雪男が名殘茶會に大寂びの底光を發揮し、京都鹿ヶ谷では住友春翠男が

口切茶會に大氣張の名器を展示し、異曲同工京阪相隔てゝ旗鼓相當つた壯觀は、大に茶人社會を賑はし、彼等をして今年は茶湯の當り年と謳歌せしめた、而して網島名殘茶會に就ては已に其概要を掲げたから、今茶に鹿ヶ谷口切茶會の大略を記す事としやう、昔し俊寛僧都等が平家討滅の密議を凝したと云ふ洛東鹿ヶ谷の地を相し、住友男が自身宗匠で別業經營に取掛られたのは今より數年前の事であつた、然るに近頃土木工竣つて、今年初冬に口切茶會を出さるるであらうとは關西茶人間の評判であつたが、男は余等が光悅會及び東山大茶會の爲め必定入洛すべきを推し測つて、十一月二十四日新築鹿ヶ谷別莊漱芳庵に案内せられた、而して其相客は藤田江雪男、馬越化生、野崎幻庵、山澄力太郎で、時刻は午前十時よりと云ふ事であつた乃ち同日時鹿ヶ谷別莊に推參すれば、本門を入つて正面の玄關より右手の中門に接續して三疊の寄附があつて、其壁床の中釘には古銅掛花入を掛けて山菊一枝を挿み、席上に佐賀段通を敷いて小形の手爐二個を並べ、此處には火鉢も煙草盆も出さず、染附丸紋茶碗で、白湯を汲出されたのは、如何にもサツパリした寄附であつた、夫れより頓て樹密に苔茂り、遣水潺湲たる長露地に立ち出で、東山の秋色を見渡しつつ、一構への茶室の前を通り越して腰掛待合に打通れば、稻根編物圓座を並べた一方に、時代秋草蒔繪丸形手焙と、吳洲八角鹿の繪火入を供へた寸松庵傳來桑菊桐透し鯨手莨盆とを置合されたが、程なく庵主の出迎へがあつたので、少しく逆戻りして茶室の前に赴き、物寂びた蹲踞石で嗽、ぎつゝ仰いで破風を見上ぐれば、豫て見覺えある東皐心越禪師筆漱芳の篆書二字額が懸けられたから、扨ては庵主の物數寄で此茶室を漱芳と名け、又水戸家舊藏朱舜水命名唐物漱芳茶入を今日使用せらるゝよなと合點し、茶臘に依り馬越化生翁を先達として順次庵室に繰込めば、床に定家卿二首懷紙を掛けられたが、其歌は左の如くである。

山家擣衣

こぬ人をなをまつのとにたきすさふ
しは〳〵秋の衣をそうつ

關路曉霧

こえわふるこのしたやみの霧のまに
ありあけしらぬ足柄の山

表具は中紫大牡丹印金、一文字風帶白地大牡丹古金襴、上下縹色紋甲斐絹で、筆蹟と云ひ表裝と云ひ、大名氣分が滿ちみちて如何にも堂々たる一軸であつた。

二

鹿ヶ谷漱芳庵茶會は午前十時より始むる所謂前茶なる者で、午餐の前に菓子と濃茶を振舞はるゝ趣向であるから、入席して主客の挨拶終るや、庵主は直に炭手前に取掛られたが、其器物は左の通りであつた。

釜　古天明作日の丸　銘時津風
香合　交趾菊蟹
羽箒　白鵜三つ羽
灰器　一入作燒拔
如上炭手前器具は雜器の端々まで皆結構づくめであつたが、中にも交趾菊蟹香合は

爐縁　久以作澤栗
香　銘九重
火箸　庸軒所持桑柄、灰七同然
鐶　德元作鐵角筋桑眼
五德　興次郎作薩摩屋形
炭斗　新瓢

小堀權十郎箱書附で、菊が萠黃、蟹が黃で、蓋の中央にある黃蟹の上に一點膨れ出した玉の如き者あるが珍らしく、無論無疵で其釉色の美事さ言ふばかりなかつた、又銘時津風と云ふ古天明釜は、西本願寺傳來で日の丸形と云ふ通り、丸々として至つて締つた者であつた、斯くて長寬作紅溜縁高に盛られた庵主好み銘秋の山と云へる御菓子を頂戴して、一旦元の腰掛に中立すれば、例の北山時雨の空に、鹿ヶ谷の靜寂を破つて、庵主が自ら打出された雲龍院傳來南蠻銅鑼七點の合圖は搖曳長く露地を傳はりて、今日は殊更心耳を澄させた、斯くて再び入席すれば、床には宗旦作竹一重切銘しぐれの直書附ある花入に、初嵐と云へる白椿と谷桑一枝を挿まれた風情又なく佳く、紋服袴の上に三齋羽織を着けて整坐された庵主の濃茶手前を見れば、其器物は左の通りであつた。

水指　利休所持備前耳附共蓋
茶入　唐物宋舜永銘瀧芳、袋和久田
茶杓　松浦鎭信共筒銘サカヒ
蓋置　青竹引切
茶　初昔
茶碗　中興名物東高麗遠州箱書附
建水　木地曲

漱芳茶入は水戸徳川家舊藏で、朱舜水と心越禪師の記文卷物が附屬し、水戸家八代鼎山公の箱書附もあつて、鶴の子形と云ふ細長く且つ締つた者であるが、薄紫地に黑飴釉の模樣美事に、絲切の上に釉飛びがあつて、小形ながらも凜として一座を支配する貫錄がある、東高麗茶碗は遠州所持で、江戸斗々屋とも又は江戸高麗とも云ふが、斗々屋中の一種で、釉色光澤麗しく、其形割合に締つて頗る氣の利いた者であつた。

三

漱芳庵の濃茶器物は何れも名物揃ひであつたが、宗旦一重切花入は大寂物で、直書附の銘時雨と云ふが時節に適つて一言もなく、中興名物利休所持備前耳附共蓋水指は、利休より春屋國師に贈り、國師自ら箱書附した者で、火變り面白く胡麻釉の景色が何とも言はれぬ名品である、又松浦鎭信公の茶杓は節の上下が色變りで、此人の作としては非常に景色の多い方である、斯くて濃茶一巡するや廣間にて湯漬を進ずべしと云ふ挨拶があつたので、一同漱芳庵を立ち出で、庵主が數年間丹精を籠めて經營せられた長露地を廣間の方へと辿り行けば、此邊は京都の町外れで、近く東山に接して居るから、山氣自ら濕潤して、杉苔は綠氈を敷きたるが如く、樹々の梢に散り殘つた紅葉は丹火疎らに遣り水に映り、樹下岩角の山菊が霜に飽きて瘦枯た初冬の風情面白く、陶朱の庭前に淵明の興趣を味はんとする庵主の物數寄心憎くこそ思はれけれ、扨て廣間は六疊で一間床に出來無類なる狩野山雪筆眞山水を掛け、古伊賀耳附置花入に紅白牡丹を挿み、床脇に松花堂筆三十六歌仙書畫帖を飾つて、薄茶に先だち宗哲作利休形黑膳椀、道志作渦蒔繪引盃で庵主自ら入念の懷石を運び出されたのは誠に恐縮の至りであつたが、其獻立は左の通りである。

汁　半月蕪、合せ味噌　落しからし
向附　乾山菊の繪、鯛絲造り、坂本きく、黑ゐは梅醬油
焼物　織部透手鉢　幽庵焼うぼせ
煮物　鶉しんじよ角切、青み大根、なめ茸、干山椒
強肴　吳洲赤繪花鳥鉢　唐芋煮つけ、花かつを
吸物　水前寺海苔、生薑
八寸　落の蓼
同　油滴天目盞、鹽辛、雲丹
同　御本刷毛目四方鉢、車海老、ちよろぎ、豆腐だき合せ
香物　繪千枚漬
同　祥瑞香形鶴鼓紋鉢　ほうれん草、柚醬油
盃　染附魚手、古唐津、和蘭陀藍繪花鳥、染附雁木胴紐銘々
酒器　古赤繪獅子撮み蓋姥口　鐵銚子、古備前德利

如上懷石は庵主の深き心入で、材料も調理も善美を盡されたから、今更ながら關東料

理の遠く關西に及ばぬ事を自覺したが、其又器物の結構な事は一々説明の限りでない、併し澤山な强肴を盛分けた吳洲赤繪花鳥鉢、御本刷毛目四方鉢、祥瑞沓形鷄鼓紋鉢等に至つては、鉢類の潤澤なる關西大家の間に在つても定めて有數の逸品と頷かれ、藤田男名殘茶會の大寂び物と對照して、異曲同工、各其特長を示されたのが面白かつた。

四

鹿ヶ谷廣間の懷石終りを告ぐるや、庵主自ら薄茶手前に取掛られたが、桐木地蘆透風爐先の内に眞塗黑長板を置き、石州所持南蠻砂張轆轤目水指、磁青磁鯱耳杓立、鐵張金象眼火箸、古染附桔梗蓋置、高取胴締建水を取合せ、釜は寒雉作霰蒲團形で、爐縁は眞塗菊置上、五德は道鈴作中爪で、其他一座の飾附は左の通りであつた。

香合	祥瑞襞扇、秋詩	香	銘柴舟
羽箒	野雁	鐶	槌目
灰匙	利休形	茶入	驚司甫信好み溜塗大棗 銘雲の上二つの内
炭斗	唐物竹組口透し	灰器	保全作雲華燒
茶碗	ノンカウ作黑樂 銘金毛		

替　御本菊の繪金森宗和箱書五つの内　茶杓　常叟作銘初霜　干菓子　唐物黑無地花輪形盆、湫芳二字紅白打物千代結、有平

如上薄茶器は小間の名物茶器に對して更に遜色なき名品揃ひであつたが、一際優れて衆目を惹いたのは南蠻砂張轆轤目水指であつた、是は京都の有名な雁半舊藏で、砂張水指としては最大型の方で、口廻り作行の精巧なる事言語に絶し、舊持主が秘藏して、底の磨れぬやうに白紙を張附けて置いたのを今度取剝がして使用せられたさうだが、是れは馬越翁が如何に正客振りを發揮しやうとしても、流石にお水を拂つて拜見とは言ひ兼ねた程の名品であつた、小間の交趾菊蟹香合が餘りに優れて居つたので、廣間の祥瑞襞扇香合は割合に損な出幕であつたが猶ほ名品たるを失はず、ノンカウ黑銘金毛茶碗も亦誠に殊勝な出來で、動もすれば强弩の末勢となり易い廣間をして、始終緊張の氣分を保たせたのは流石に大家の御茶事と頷かれた、隨つて左顧右眄、殆んど應接に暇あらず、往々御挨拶を失念した者が少くないのは偏に庵主の諒恕を乞はねばならぬ、左あれ今度の茶會に就き、庵主が如何に苦心せられたかは前掲懷記を檢按すれば直に理解せらるゝだらう、斯る茶會に對して茶評を試むるのは一流の

劍客と太刀打するやうなもので、打てば必ず負けるの恐れはあるが、一評なくては庵主が手持無沙汰であらうから、次に皐見を述ぶる事としやう。

五

澂芳庵主は茶事上一見識を有して取捨を苟もせぬ美質を具へらるるから、心附いた所は率直に申出て自由に其取捨を乞ふ事としやう、其處で最初寄附に小さい手爐二つを出したのみで、底冷のする時雨空に火鉢一つも置かなかつたのは、七十八歳の馬越老人が元氣旺盛の內情を知ろし召されての作略であらうか、若し左もなくば忽ち老人虐待の訴訟が起るであらう、又小間に小さい古天明日の丸釜を掛けられたのは、一說に釜が小さくて其周圍に紅火の見ゆるは客に暖氣を感ぜしむる者なりとあるを採用されたのであらうか、左れど春暖の節好んで小釜を釣るの理由より推せば、口切時節の釜は大型で廣口で、席中に暖氣を催すべき者を本體と云はずばなるまい、是將た庵主千慮の一失か或は其他の事由ありや、又炭手前に新瓢として肉が薄く嵩の大きな粗瓢を使はれたが、古來瓢炭斗は茶人の選擇最も六かしい者で、松平不昧公は大崎園內に瓢簞畑を控へ數百の內より一つか二つか肉厚く形締つた者を採られたと云ふ、近時に在つては松浦心月伯が每年口切に自製瓢を使はれたが、今年は瓢の出來惡しとて時に新瓢を使はぬ事があつた、其處で聞かまほしきは關西茶人の瓢炭斗に對する好尙如何である、又今回は午前十時の御案內で所謂前茶式であつたが、此前茶の得失に就ては屢々庵主に抗議を申立てた事があるから今又之を繰返さぬが、此前茶なる者は德川の末期關西地方の茶風が紊れて茶事が飮酒家の犧牲となつた頃より起つた者である事を今日偶然發見したのは正客馬越翁が元氣旺盛の評判高き に打興じて、廣間で頻りに數盞を傾けた時、今日は前茶が却て幸ひであつた、斯く酩酊してからは迚も濃い茶席の正客は勤まらぬと無意識に洩らされた一言に依つて、前茶は酒席に移らぬ前に早く茶禮を濟ましして、廣間で心置きなく銘酊する便宜の爲に起つた者である事を確かめたのである、余は下戸なるが爲めに我田引水するではないが、關西茶道の牛耳を執らるゝ當庵主に對しては、禪僧珠光に發端して、利休居士や南坊宗啓に傳はつた茶道の根本に遡つて、前茶の得失に就き更に一考を乞ひたい

のである、斯様に妄評を試むるも所謂備はるを君子に責むるまでゞ今度の一會は大正時代に於ける有數の出來茶と云ふべく、東都方面では茶老次第に凋落して益〻心細さを感ずる折柄、關西に於ては當庵主と云ひ藤田男と云ひ、其他歴々の茶人が隆々勃興せんとする勢あるのを見て、余は大正名器鑑完成後は一年中二三ヶ月を京阪間に送つて、其丹精を後代に書き殘さずばなるまいと思ひ附いた程であるが、猶ほ當庵主の如き眞摯なる茶事研究家には、毎度紋切形の畫茶會のみでなく、他の風情多き朝會夜會等を試み、夫れ〴〵特長ある茶味を自らも味はひ、又人にも味はせられん事を敢て嘱望して已まぬのである。

（大正十年十二月二日）

夕時雨會

一

波多野古溪翁が抱一上人箱書附銘夕時雨と云へる出雲燒片身替り茶碗を獲て上人が俳諧を嗜み、又河東節を好みたる風流を偲び、故人の俳句を寄せ集めて夕時雨と題する河東節一曲を物し、長唄研精會の吉住小十郎、本名山田舜平氏に其節附を依頼したのは大正九年一月の事であるから、同年初冬簷端の松に時雨する頃には、此新曲が必ず世に出るだらうと豫期したのに、中一年を隔てゝ今年十二月二日夕刻濱町常磐屋に參集すべく古溪翁より案内せられたので、扨は愈々夕時雨茶碗と其一曲とを開かるゝ趣向よなと心に頷いて、御示刻常磐屋に赴けば、一間四方床十疊の下座敷が當夜の寄附で、其床に其角の『あれ聞けとしぐれ來る夜の鐘の聲と』云ふ短冊を掛け、仁清編笠形釣花入に椿と寒菊を活けたる風情、早や一座に江戸氣分を漲よはせて並々ならぬ趣向を見せられたが、床脇の向ふ切爐中には蘆屋の釜に松風の響きを傳へ、山澄宗澄父子が宗匠役を勤めて、抱一銘夕時雨茶碗で夕食前に薄茶一服如何でござると頻に一座を取持たれた、其時床中に金粉字形でひゞくと書附けた、丈三尺ばかりの黑塗箱蓋のあるのは如何なる者かと主人に問へば、是れは古近江作で抱一上人が響と命名した河東節三味線箱の蓋であるが、實物は後刻御覽に入れ又御聞に達するであらうと答へられた、猶ほ其傍に宗偏作銘九折と云へる茶杓の筒を飾られたが、是れ

は宗偏共筒で左の一首が書附けてあつた。

中々につゝら折なる道たえて　雪に隣のちかき山里

卽ち當夜薄茶に使はれた茶杓で終に大雪となるべき夕時雨の果てを豫想した取合せと覺しく、一年越しに主人が苦心慘憺の凡ならざるを一座の飾附が歷々證據立て居た、扨て斯かる風流會に招がれた顏觸れ如何と見廻せば、鎌田榮吉、門野幾之進、藤山雷太、和田豐治、高島小金治、池田成彬、有賀長文、岩原謙三、今村繁三、倉知誠夫等十數氏であつたが、此客方の評議に抑〳〵吾等は今夕招待せらるべき資格ありや、中には多少風流客もあるやうだが、又相應に無藝大食連があるのは不審に堪へぬと言ひ出す者があつた、其時一人座上を睥睨して心得顏に、如何樣此中には素人も玄人もあるが、是れが互違ひに着座すれば、卽ち時雨茶碗の如く片身替と爲るではないかと言つた警句で、一同成程と納まつたのは時に取つての一興であつた。

二

波多野古溪翁が愛藏の抱一銘夕時雨茶碗披きの爲めに自ら作られた河東節夕時雨の文句は、今年初鷄肋雜炊と題する記事中に揭げて置いたから、今度は之を省いて古溪翁が自ら書かれた其跋文を左に採錄する事としやう。

私は先年權兵衞作片身替の茶碗を手に入れた、箱の銘は抱一上人筆で夕時雨とある、蓋裡には『待乳沈んで木末のりこむ今戸橋云々の』俗謠が同筆で書いてある、此唄は英一蝶の作だといふことになつて居るが、夫れが誰の作であらうとも、江戸吉原の通人氣分がそこに遺憾なく言ひ現はされて居る、而して茶碗の作柄が輕妙飄逸で、是れ亦江戸趣味を代表するやうな感じがする上に、偶々釉藥が片身替りになつてゐるので、上人も當時に在つて特に銘を此端唄に因んで夕時雨とは命ぜられたことかと思はるゝ、上人は德川文明が爛熟し切つた時代に大名の家の次男に生れたのだ、然も其大名は德川の譜代で大老職に爲る資格を有する派手な家柄であつた、而して他の武家へ養子へ行つたり、分家して士分に爲つたりするやうな事をしないで佛門に入り、幾何もなく江戸の根岸に隱居して風流韻事に生涯を委ね、

常に花街に出入して深く名節に拘はらなかつた、こんな人であつたから江戸文藝の忠實なる修養者と爲り得たると同時に、その作品が繪畫にあつても俳句にあつても、江戸の敗頽的氣分の間に猶一種冒すべからざる權威を備へてゐたのだ、私の片身替りの茶碗も銘と端唄と上人の人格とが絡み合つて馬鹿に面白い、其處で私は上人が此茶碗に題すべく筆を執つた其場合と場所と氣持とを想像して一篇の唄ひものを作つてみた、そして上人は河東節を嗜まれたと云ふ事であるから、江本(後改姓して山田)舜平君に賴んで節附をして貰つて、新曲夕時雨と名づけ今茲に茶碗と共に同好者の前に披露することにした、唄の文句に俳句を多く取つたのは、上人が俳句趣味を持つてゐたからだ、河東節は元來淨瑠璃であつて、常に物語風に作られてあるが、私は唄でなければ上人の氣分を顯はす事が出來ないと考へて、物語風の歌詞を作る事をせなかつた、節も待乳沈んでの端唄の文句の所などは、殊更に河東の節を避けて小唄風にしてある、是れは河東節に於ける幾多の類例に背いて居る事ではあるが、江本君が特に意を用ひて斯うしたのだ。

三

夕時雨會で趣向澤山の薄茶が濟んだ後、一時廣間の晩餐席に動座すれば、常磐屋主人が氣を利かせて今夜の會に相應しく、床に師宣風の浮世繪を掛られた頓て柳家小さんの落語が濟むと、河東節の方では十寸見東舜と云ふ山田舜平がタテ、故秀翁の子息で十二代目河東節家元を相續した十寸見東觚がワキ、三味線山彦榮子、同不二子、上調子同錦子の顏觸れで、由緣江戸櫻卽ち助六の一曲が唄はれた而して此亡び行く曲の哀れを現實に代表して居る山彦榮子と云ふ八十許りのお婆さんが、彼の抱一上人が響くと命名したと云ふ薄手の三味線を彈たのである、助六は寶曆十一年四代目太夫河東と初代山彦河良との作曲で、河東節の代表曲として傳はり、歷代團十郎が之を演ずるに當り、淺草の札差だの魚河岸の旦那衆抔が簾中で之を語り、抱一上人の如きも亦其河東御連中の一人であつたと云ふ事であるから、文化文政時代には極度の人氣を集めた者であるが、通人に喜ばるゝ者だけに曲其物は至つて陰氣な者で、次第に維新後の人氣に遠ざかり、今は亡び行く曲の一種となつて仕舞つたのは、一つには此流

に名人が出なかつた爲であらう、何流でも名人さへ出れば必ず流行する者だから、河東節でも今後名人が出て時代相當の新曲などが出來たらば、當代の音曲が次第に向上するのと相合して、再び頭を擡げる時代が來るかも知らぬ、斯くて此一曲を語り終るを待ち敢ず、古溪翁は左も嬉しげに榮子婆さんの手から問題の三味線を引取つて一座の回覽に供されたが、是れは極めて細棹で、轉軫の海老尾を面に抱一上人筆の響の一字を象眼で現はし、絃卷の一端に雁金の紋が附いて居るので、上人は此紋に因んで響と云ふ銘を附けたのではあるまいかと云ふ說もあつたが、併し河東の三味線引は代々山彥姓であるから此姓より響と云ふ銘を思ひ附いたのであらう、最初に夕時雨の茶碗を獲て抱一上人の俳句及び河東節癖を聯想し、自ら夕時雨の一曲を作つた古溪翁が、何う云ふ緣故でか、抱一銘響くと云へる古近江作三味線を手に入れた時の得意は如何ばかりであつたらう、夫れに附けても折角山田舜平氏が節附した新曲を、當夜主人自ら語らなかつたのは姑く恕すべしとするも、何故山田に引き語りさせなかつたであらうか、山田が約一週間許りも晝夜打通して苦心慘憺した節附を、闇から闇に葬るとは譯知りの古溪翁としては餘りに無慈悲の沙汰ならずや。

四

波多野古溪翁の夕時雨會で河東節助六の一曲閲るや、新しい踊師匠藤間靜枝が裳束着けて河東節夜の編笠を踊られた、是れは百卅年前瀨川路考が踊つた者を近頃復興したとか云ふ効能書があつたが、狂女姿で最初編笠を被つての出は如何にもしほらしく、踊り進んで編笠を脫ぎ捨て、此曲中の名文として知らるゝ、

憎い〳〵は可愛の裏よ、いやじや〳〵は又その裏よ、泣いておどすはそれ裏のうら

ヨイヤサ。

の邊に至りては、五十路に近い姥櫻も越路の雪を肌に殘して、過ぎ來し方の手練手管を活動寫眞にしたやうな舞振で、嬌艶人を魅するの趣があつた、併しお夏狂亂然たる狂女一人で牛の何やらのやうな長たらしい唄に附き合つて行くのだから、今少し氣を利かして早く切上げて欲しかつた、扨て是れが眞打かと思へば、一座の喝采に迎へられて古溪翁が、吉住流の長唄を語る老妓をワキとして謠ひ出した助六は、河東節

のとは大違ひで頗る早間で派手なものであつたが、大風の中に交つた夕時雨の如く、シテの聲がワキのに蔽はれて、殆んど其本音を聞分くる事の出來なかつたのは聊か物足らぬ感じがした、餘興は是れで終りを告げたが、主人は今日夕時雨會を催すに當り、天が感應ましく〳〵て、簷端の松に颯と一時雨の掛らん事を豫期したのに、折惡く一天冴え渡つたのを、左ながら我が不調法であるかの如く、諸君は朝寢坊で御存じもあるまいが、今早朝自分は時雨が降つて居たのを目擊したから、今夕は定めて時雨るゝだらうと思つたのに、今まで其樣子のないのは不審であるが、頓て小夜時雨が來る事必定なりなど、頻りに辯護に勤めた翁の稚氣滿々たるは大に一座の感興を惹いた、偶々當夜の一客であつた和田豐治氏が、抱一上人筆で河東節に緣ある自畫讃三幅對を所藏せらるゝ事を口走られた、其畫題が春季に屬するらしいので、來春櫻花爛漫の頃今度は和田氏が主人となつて、夕時雨會の向ふを張るべく春雨會を開かるべしと滿場一致の宣告を受けた、處が氏も其儀ならば決して人後に落つまじと云ふ景色を現はしたので、來春は今夜の時雨に引替て、更に春雨の音を聞き得るだらうと、座客一同無限の興味を覺えつゝ清談時移りて冬の夜の更くるをも打ち忘れた。

（大正十年十二月十二日）

楓軒口切

上

冬枯の根岸の里に返り花の咲いたやうに、吉田楓軒君が五年振で珍しくも口切茶會を催された、余は其十二月十二日の正午の一組に加はつて寄附に罷り通れば、今泉雄作、白石村治、田中親美、梅澤鶴叟が相客であつた、三疊の寄附の板敷には、丸形小土風爐に不味好み絲目銀瓶を掛け、時代禪茶盆に朝鮮唐津香煎入と朝日燒新茶碗を置き合せ、松花堂好み松木地手附煙草盆に小形の萩燒火入を備へられたが、火入と煙草盆とが好く取合つたのと、朝鮮唐津香煎入の釉色面白く、其形の素直なのとが嬉しかつた、斯くて庵主の出迎へあるや、今泉翁を先達として順次庵室に繰込めば、例の三疊臺目の床に淳朋禪師の墨蹟を掛けられたが、其文句は左の通りである。

四十三年遠別離　此心存想豈忘之

音書梵偈卒然見　恰似當時對語時

至元庚辰、余與一山在玉几、作夏別去、如許之久、其子無着緣首座携此軸見示、恍如對紫芝眉宇、因玩偈干其後。

至治壬戌孟冬廿有一日　靈隱　淳朋

淳朋禪師の名は從來餘り耳にした事がないが、此人は鎌倉中期日本に渡來して最も有名であつた寧一山の舊友で、一山と一別以來四十三年振で其弟子の無着緣首座が持參した一山の墨蹟を見て、往時を追懷した餘り此一偈を作つた者である、至つて謹嚴なる筆蹟で壬戌孟冬廿有一日と云ふ日附が如何にも時節相應で、是が來年の口切であつたならば干支が全く同一であるから、一層適切であつたらうと思はれた、扨て庵主出でゝ挨拶あり、續いて炭手前に取掛られたが其器物は左の通りであつた。

釜　蘆屋松竹地紋獅子面鐶附　爐緣　元興寺古材　炭斗　黑塗曲

香合　染附菱牛　羽箒　大鳥　灰器　了入燒拔き

蘆屋釜は赤味を帶びた地肌に光澤があつて、大々とした丸形で、其獅子面鐶附が珍らしかつたが、染附菱牛も身蓋共一點の疵なく、此手の絕品と見受けられた、斯くて炭手前終るや直に黑塗四方膳で懷石を運び出されたが、其器具及び獻立は左の通りであつた。

汁　三州味噌、大根落し辛子　向附　金欄手、搔鯛、岩茸、山葵、甘酢　椀　鴨、苞豆腐、人參細切、菜

燒物　春慶塗重箱、まなかつた　吸物　芽獨活　八寸　からすみ、百合

香物　染附小鉢、新澤庵　酒器　嬉森庵銚子　菓子　小麥饅頭蒸かして緣高に入る

中

根岸吉田楓軒の口切茶會で懷石終るや、一同腰掛に中立すれば、小春凪の暖き日蔭に百舌鳥の啼く聲が聞えて、如何にも冬の根岸の里氣分が浮び出でたが、折柄庵主の打出された合圖の銅鑼七點は、小形らしく覺えて搖曳は餘り長くなかつたが、打込みの音色は無類であつた、扨て後座の床如何と見れば、一見遠州作と頷かるゝ節下に竪割一本ある一重切大竹筒に、寒菊と臘梅を活けられたが、花と花入と相應して何とも言はれぬ風情であつた、此花入は溝口伯家傳來で銘をあまのと云ふ者であるが、多分河

内國天野より出た竹なので、遠州が斯く命名したのであらう、大竹で厚肉で、少しく青味を帶びて居て、節下の竪割一本が利休作園城寺竹花入と同然、實に此花入の生命である、斯くて庵主の濃い茶手前があつたが其器物は左の通りである。

茶入　堺春慶肩衝、　水指　南蠻繩籠　茶杓　石州贈り筒
茶碗　玉子手銘初瀬　建水　砂張　蓋置　青竹引切
茶　初昔

前座に元僧の墨跡が掛つて、後座に遠州の名物竹花入が出た口切茶會の濃茶器具組合としては、此邊が先づ寸分動かぬ所であらう、石州の茶杓は筒に茶酌依所望田三郎兵衞として、其下に石の一字が書附けてあるから、是れは多分石州が田と云ふ家來の所望に應じて削られた者であらう、玉子手茶碗は小堀備中守箱書附で、蓋に玉子手高麗銘初瀬とある、内外共玉子色で青味の火變りが少いのは少しく物足らぬ感じがするが、高臺は煙草の葉形の土を見て釉質柔かく、内部の鏡落が稍深く、目が三つで呑口に金粉繕ひがあるのと、竪樋が一本あるだけで誠に無難な又頃合な茶碗である、而して南蠻繩籠水指も亦此種の逸品で、火變りなど申分なき出來であるから、之に配するに當家所藏の中興名物銘蘆垣茶入でも以てしたらば、夫れこそ最上の組合せであつたらうが、今回は堺春慶茶入を使はれたから是れのみ少しく位負けしたやうに感ぜられた、併し大體急所に名品の配置が行屆いて、然も一品も餘計な者を使はれなかつた庵主の簡潔主義は、例に依つて最も先づ我意を得たのである。

下

楓軒口切は當然廣間があるだらうと思はれたが、果して其通りであつた、其廣間は例の八疊で、床には松花堂筆朝陽縫衣圖を掛けられたが、細長い幅の上端に江月和尚の讃があつて、落款の松花堂三字を大師樣で書いて居るのが珍しく、其前には青貝折足卓の上に雲鶴姥口香爐を置き、書院には遠州藏帳古銅四方花入に寒牡丹一輪を挿み、高臺寺蒔繪爐縁に蘆屋霰丸紋内獅子模樣釜を掛け、抱一上人梅の繪風爐先内に締つた遠州棚を置いて、染附共蓋芋頭山水繪水指を飾られたが、青貝折足卓が模樣澤山で松花堂一軸の前には少しく騷がしく思はれた外、古銅花入も頗る好く、染附芋頭水

指最も好く、小間と相對して互角の取組と見受けられた、唯些細の事ではあるが廣間の染附芋頭水指を見ると同時に、懷石の時に使はれた染附香の物鉢が忽ち眼中に浮んで來るから、彼の香の物鉢は何か他の寂物と差替へられて欲しいのである、扨て薄茶は當日の末客たる梅澤鶴叟が代點し、茶碗は御本と丁入作鶴模樣筒、茶杓は象牙、茶入は藤重中黑棗、菓子器は唐物朱菊形、菓子は豆粉瓢箪空也の文字入りであつた、猶ほ此席には寄附の萩火入真盆の外に、雲草火入を備へた溜塗手附煙草盆を出されたが、始中終百事一貫して、今日東京茶人現役將校中に斯程の武者振を示し得る者は五指を屈する事が出來なからうと思ふ、東京には和敬會と稱する十六羅漢の組織した茶會があるが、松浦心月伯三井松籟男等の歸幽以後、羅漢も大方滅滅し、金箔が剝げたり手足が折れたりして、今は纔に數體を剩すに過ぎず、而して其後繼者と覩るべき者の更に崛起する樣子がないから、此上老茶人が二三人も亡くなれば、東都の茶界は見る影もなく荒廢に歸するだらうと大に心細く感じて居た折柄、其十六羅漢の一體であつて四五年以來鳴かず飛ばずの楓軒老漢が、忽然捲土重來の勢を示して、茲に此復活茶會を催されたのは大に人意を強うするに足るので、余は楓軒が今度の茶會を手始めとして、來年より大に其餘勇を鼓し、今や極端に達したる東都茶壇の寂寞を破られん事を大に囑望する次第である。

（大正十年十二月二十六日）

青山夜話會

上

根津青山嘉一郎君は、大正九年の歳暮に赤坂青山の自邸庵室で夜話會を開かれたが、大正十年も十二月二十六日より同樣の催しがあつて、此順で行けば歳末の青山夜話會は根津家の年中行事に爲りさうである、何方でも年末は百事多忙であるのに、況して根津君の如き活動家が、俗務蝟集の重圍を切拔けて夕刻事務所より歸宅するや、ビジネスコートと十德姿と早替りするのは中々容易な事でなからうが、茶事の眞味は實際此活劇中に在るので、青山君が百忙中に一閑を偸んで、此夜話會を開かるゝ胸中綽々の餘裕には大に敬服せざるを得ぬ、斯くて余は其發會の二十六日午後六時より

根津邸に推參して、當夜の寄附と定められた客間の次の間六疊の席に罷通れば、又平風の浮世繪六枚屏風を立廻したる中に、紫地丸紋絨氈を敷き、桐木地大火鉢の傍に宗和好み鎧櫃黃盆を置いて、之に朱買臣と云へる染附芝負ひ人物圖火入を備へ、赤繪茶碗で白湯を汲み出されたが、相客は加藤正義、吉田楓軒、益田多喜、仰木魯堂の顏觸れで、寒夜の事とて中窓の外に新手桶を置て手洗場と爲し、廊下傳ひに客を庵室に繰込ましむる趣向は、老客優待上如何にも用意周到であつた、而して庵室は昨年同樣原叟好み三疊半太柱席で、床には大德寺清巖宗渭の筆で舌上有龍泉の五字一行を掛けられた、是れは蜂須賀家傳來で清巖としては無類の傑作である其上に茶地上代紗の中廻しの美事なる事言語に絕し、句意は舌端劍ありと云ふに同じければ、今夜の如き夜話會の主客双方に對して誠に適切と思はれた、此時庵主は歸宅して未だ間もない樣子で、羽織着流しの儘挨拶に出でられたが、例の性急で一禮濟むや直に炭手前に取掛り、今夜は一切庵主直營で其要領を得る事夥しく、細節に拘らずして何事もサッサッとやつて除けられたが、使用の器物は左の通りであつた。

釜　蘆屋猿猴地紋廣口

羽箒　鶴

香合　染附犬莊子

灰器　ノンカウ燒拔き

炭斗　竹組菜籠

灰匙　桑柄火箸同斷

蘆屋猿猴地紋釜は其廣口に相應した時代唐銅蓋附で、冬季の間溫めとして此上なく、香合犬莊子は蓋の撮みが唐犬で、身蓋共に蝶と草花模樣があるので斯く呼ばれ、無論形物で至つて珍しい者である、此外席中には天平時代とも見らるゝ短檠が、南都興福寺古材の太柱の傍に置かれて、飛驒の國產時代檜の天然木の爐緣と三方相對して大に古色を漲らせたので、一層歲暮夜會の感を深めたのである。

中

青山夜話會の庵主直營炭手前が濟むや、溜塗半月膳で左の懷石が運び出された。

汁	鴨切身、卯の花汁	向附	萩燒割山椒、大根、胡羅蔔膾	碗	甘鯛、豆腐、海苔
燒物	乾山雪持笹繪口廻透し鉢、はぜ昆布卷	吸物	芽獨活、針生薑	八寸	百合、はぜの子糟漬
香物	尹部圓座小鉢、新澤庵	酒器	染付四方蓋鐵銚子、朝鮮唐津德利、唐津及び染付捻盃	菓子	蒸かし小麥饅頭緣高に入れて

懷石は時節相應で固より結構、器具も亦品揃ひで萩燒割山椒は好く半月膳に取合ひ、

乾山雪持笹の繪鉢と尹部圓座小鉢とは、二つながら餘り絶品であるから新木の八寸を省き、燒物を重箱の下の段に入れ、其上の段に八寸を盛つて乾山の名鉢は之を他日に廻した方が歳暮の物足らぬ氣分が現はれて、却て面白からうなどゝケチな了簡も出して見たが、庵主は先日馬越翁の口切りに重箱が出たから、今度は同趣向を避けたのであるさうだ、又酒器の染附四方蓋銚子は小ぢんまりして意氣な者である、唐津德利も亦好い頃合で、此に二品揃へて出すのは歳暮茶として是も少しく贅すぎる、扨懷石終つて元の寄附に中立すれば、合圖はなくて庵主自ら出で迎はれたが、再び入席して床中を見れば、遠州作寂竹一重切に、白玉椿の半開二輪を挿まれた風情が又なく好かつた、而して炭手前で既に大進歩を示された庵主は、濃茶手前でもウンと落附き拂つて先天的大度胸を示されたが、其器物は左の通りであつた。

茶入　紹鷗　薩摩吹雪　廣東
水指　瀬戸一重口　銘白藏主
茶碗　雨漏大疵物
建水　塗曲
茶杓　利休作蟲喰
蓋置　青竹引切
茶　初昔

今度の道具組合せは庵主の獨斷で、何人にも相談せぬと云ふ觸れ出しだが、如何にも素人放れがして居つた、雨漏茶碗は坂本周齋卽ち閑事庵宗信の箱書附で、其大寂びなのが歳暮に眞向きなり、利休蟲喰茶杓は共筒の外に隨流の替筒があつて、比較的重過ぎた樣だが、五郎塗と覺しくて黑漆の透き加減が得も言はれぬ紹鷗吹雪棗とは如何にも好い配合であつた、瀬戸一重口銘白藏主水指は橋姫手で、釉色の變化多く口緣下に相對して小耳があつて、一ヶ所白茶釉の掛つて居る處があるので白藏主の名が起つたのであらうが、瀬戸水指としては無類飛切である、斯も寂味十分なる器物の配合を、茶臘の割合に淺い當庵主が、若し獨斷で專行し得たとすれば眞に後生畏るべしであるが、餘に出來過ぎて居るが爲め、失禮ながら多少黑幕參謀官の獻策が加はつたらうと邪推せざるを得なんだ、併し何れにしても成功は成功で只管感服の外なかつた。

下

青山夜話會の濃茶一巡するや、飯頭の川部太郎は庵主の代點として同席で薄茶手前に取掛られたが、其器物は左の通りであつた。

茶入　尹部口廣　　茶杓　利休形象牙　　茶碗　一入赤樂銘可愛

替茶碗　高取燒　　建水　仁清　　水差　時代七寶手附藥鑵

以上器物の中、一入赤樂茶碗は高臺が赤土で作行は頗る長次郎に類し、内外共に黄釉が交つて至つて小形で、如何にも可愛らしい茶碗である、而して玄々齋の箱蓋書附に先づ可愛の銘を記し、次に『樂四代赤茶碗美事なれば愚句記し置く』として、

一入に可愛さ深き雪の友

とあるのは如何にも歳暮用に適切である、水指の時代七寶手附藥鑵は珍らしい傑作で、瀬戸一重口に代つて聊か見劣りせぬ程の珍器であつた、斯くて唐物黑塗四方盆に紅白青海波模様打出干菓子を盛つて薄茶を侑められたが、心置きない友垣の間柄として何んの遠慮會釋もなく、主客の問答所謂舌上有龍泉の文句を實現して、得意の高談庵室を震ふの勢があつたが、今夜は最初會であり、庵主は客と摺れ〳〵に歸宅して、俄に亭主役を勤めた爲め、器物又は懷石に就き客の質問に對してシドロモドロの點が多く、水屋で取調ぶるまで即答を保留するなど中々愛嬌を振り蒔かれたが、先般東山大茶會に關東方の旗頭として堂々と出馬した當庵主は、同時に住友春翠男の洛東鹿ケ谷茶會に臨んで、案外の正客振を發揮し、殊の外男の推賞を蒙られたさうで、中毒と云つては少しく語弊があらうが、今や茶氣滿身の有樣で、歳暮茶會を兩度まで繼續したやうの次第であるから、今後年々〳〵歳々是れが根津邸の年中行事と爲る事であらう、昨今東都の茶老漸次凋落して後繼其人に乏しき折柄、斯かる熱心と實力とを兼ね併せた青山君の出現は、誠に人意を强うするに足る、斯くて清談に時移り早や午後十時ともなりければ、老の波寄る年の瀨に暫時其老をも忘れて、互に來陽を契りつゝ青山莊を退出した。

（大正十年十二月十八日）

馬越翁口切

一

馬越化生翁は、先頃關西地方の茶會に遍參して窃に髀肉の嘆をや發しけん、歸京後突然櫻川茶寮にて近來稀なる名器揃ひの茶會を開き、翁が七十八歳の歳末に於て大正

茶史に一大異彩を放たれたのは、漸次衰殺の傾きある東都茶界に對する一大福音と云つて宜からう、而して余は十二月十八日正午の一組に加はつて、芝櫻川町馬越邸の寄附に推參したが、當日の相客は加藤正義、吉田楓軒、三井泰山、梅澤鶴叟の顔觸で、三疊寄附の隅板には丸爐に寒雉共蓋四方小釜を掛け、茶盆には朝鮮唐津香煎入と新萩燒茶碗、及び小形紗張建水を置き合せ、一閑丸手附莨盆に繪志野四方火入を備へ、萬暦氈二枚を敷いた席中に、桐木地大火鉢を置き、片隅に時代蒔繪亂れ盆を出された、斯くて主人の出迎へあるや、例の如く懷より手拭を取出し、叮嚀に敷居の上を拭いて引下られたので、加藤正義翁を先達として、順次二疊臺目庵室に繰込めば、床には團扇形に松花堂が猪頭の圖を描き、澤庵和尚が其上に讃した一軸を掛けられたが、其文句は左の通りであつた。

山河大地　有一猪頭　東望西望　荒天悠々

猪頭の圖は彼が猪肉を片手にブラ下げて天を仰いで居る處で、畫風は頗る因陀羅に類し、濃淡墨の配合申分ない出來であつたが、客の一人が此猪頭は何處やら庵主に似て居るやうだと言ひ出すや、正客加藤翁は更に熟々と之を檢査して、如何樣當庵主の肖像として別に修正すべき所もないやうであると之を裏書したが、他に一人も異議を挾む者がなかつた、斯くて庵主出でゝ例の如く謹嚴な態度で挨拶を爲し、又直に炭手前に取掛られたが、其器物は左の通りであつた。

釜　蘆屋松竹山水地紋　香合　黃瀨戸寶珠形　炭斗　不昧公手製瓢

羽箒　大鳥　灰器　湊燒　灰匙　桑柄、火箸同然

以上器物中松竹山水地紋蘆屋釜は大々とした丸形で、土佐光信下繪と見受けられ、鬼面環附で生底で、口大きく時代唐銅蓋も結構で、最上の口切釜であつた、又瓢炭斗は小形で肉が厚く、デコボコして形に無限の雅味あるのは、不昧公が幾百の瓢中より入念に選出したものであらう、兎角瓢炭斗は肉の厚きを貴び、昔左る茶人は香合の代りに肉厚き瓢炭斗の切口に香を載せて持出した事があるさうだが、此瓢の如きは正に之を實行する事が出來やうと思はれた、又黃瀨戸寶珠形香合は黃釉が粟粒のやうにざらめいて、身の內部一面に靑い丹礬釉の掛つて居るのが一段殊勝に見受けられた。

二

櫻川茶寮の小間で炭手前が終るや、庵主は老體にも拘らず自ら給仕して左の懷石を運ばれた。

汁　三州味噌、百合、辛子　向附　祥瑞福銘口紅丸形繪替り　鯛、山葵、甘酢　椀　鶉しんじよ、滑茸、栗、柚

燒物　きんこ昆布卷、干瓢胴〆、重箱に入れて　吸物　鯨骨　八寸　爛し鮭、漬し銀杏

香物　雲鶴小鉢、新澤庵　酒器　染附蓋糸目鐵銹子、青磁瓶子形德利、萬曆赤繪盃、染附六捻盃、天啓年製藍魚模樣盃　菓子　蒸栗饅頭　緣高に入れて

以上懷石は、庵主が何時も八百善ばかりでもあるまいと大に拮つて自ら大膳の太夫を勤め、竹川町花月主人に庖丁を執らせたのださうだが、汁加減に於て猶ほ一工夫と思はれた外、概して滿點及第であつた、器物の方では祥瑞口紅丸形向附が平常餘りに見受ぬ型で、其藍繪替が如何にも見事であつた、香物鉢の雲鶴小鉢も亦稀に見る美人であつたが、酒器に於ては同人より常に本家本元と云れる丈に殆ど無盡藏であつて、赤繪六捻魚の手三盃とも何れ劣らぬ絕品であつた、殊に青磁瓶子形德利は天龍寺の最上手で、肩廻りに擂座の如き花形六點あり、腰以下に雁木模樣が廻り、寸法は杓立にも適當であるが、瓶子形であるから最初より酒器に生れた者で、德利となつて使はるが其天職と言つても宜からう、斯くて懷石終つて元の寄附に中立すれば、程なく銅鑼七點の合圖があつたから、頓て復席して床中を見れば、稍丈高き伊賀耳附花入に、咲頃の白椿大輪一つと臘梅を挿まれた風情、客の口々に感嘆の聲を傳へしめた、扨ても庵主が斯程の伊賀を所持せらるゝ事は從來更に聞及ばなかつたが、是れは今より三十年前、故益田英作氏が所持して天下一伊賀花入と同時に世の中に現はれた者で、其時彼が此れよりも兄分であらうと云ふ噂があつたので、爾來深く藏して一切使用しなかつた處が、近來諸方に伊賀花入が出現し、先般東山大茶會の際は同花入を三ケ所で使はれたのを見受けたから、久方振で之を諸君の御目に掛けたのであるとは、庵主が謙遜したやうな得意談であつた、而して此伊賀花入は斜掛に半面白く、腰以下の半面は鼠色と焦げの中にブツ〳〵と石ハゼがあつて、背面の方に例の綠色のビードロ釉がある傑作で、伊賀花入番附面に於て横綱大關とは行くまいが、斷じて幕の内中軸以下には下らぬ代物と思はれた、斯くて庵主出でゝ濃茶手前に取掛られたが、其器

物は左の通りである。

茶入　遠州箱書附藏帳松花堂　袋　青木廣東　水指　木地曲

茶杓　宗旦共筒銘何似　茶碗　釘彫椀形　建水　南蠻ビ切

蓋置　青竹引切　茶　蓬の白

三

櫻川茶寮の濃茶器具取合せは、新古其處を得て近來稀なる配合であつた、其中にも高取耳、附松花堂銘玉川茶入は、例の栗色釉に黃釉の景色が現はれて、細耳の精巧なる工合、如何にも遠州藏帳品と首肯かれ、其玉川と云ふ銘は、黃釉を山吹色と看做した者と思はれた、宗旦茶杓の銘何似は利休でもなく少庵でもなく、ト云つて普通の宗旦とも見られぬ所から、作者自身に不審を起して、何似と銘したのは頗る面白い思ひ附である、殊に原叟の替筒まで添へてあるから、關西茶人に眞向きなもので、宗旦茶杓としては正に其名物の一に加はるべき者であらう、釘彫椀形茶碗は其形が至つて締つて、無論無疵で、其椀形と云ふのが極めて珍らしく、水指を木地曲にして、高取茶入と此釘彫

茶碗と宗旦茶杓と三名品を對立せしめ、蓋置を青竹にした處で、口廻りに緣を取つた最上出來の南蠻ビ切建水を使はれた組合せは、重からず輕からず、眞に能く調和を得た者で、失禮ながら近年幾回か催された櫻川茶會中の壓卷と思はれた、扨て濃茶一巡するや、頓て廣間へとの案內があつたので、飛石傳ひに小間に接續する八疊廣間に打通れば、床には尺五幅位の紙本に、一休和尙が達筆を揮つた詩歌の一軸を掛けられたが、其文句は左の通りである。

禪者詩人皆痴鈍　雪下三昧多議論

妙喜若是大應心　說食僧與香積飯

天龍寺開山和歌

たつねつる深山の奧もなかりけり

本の心をつれて來たれは

狂雲子狂歌

參しくる古則話頭もなにならす

馬越翁口切

本の心はもとのまゝにて

爲鏡晴老人書　一休判

右一軸の前に唐物四方盆を置いて九谷七寶紋模様香爐を載せ、之れに白菊の名香を薫ぜられたが、其九谷香爐の精作無類なのには一同感服の外なかつた、猶ほ床脇棚には文晁筆三十六歌仙に、堂上方の歌を張り合せた一帖を置き、其他一座の飾附は左の通りであつた。

棚　石州好み紅緣　水指　繪高麗　釜　遠州好み大西淨清作

茶入　盛阿彌竹中次　茶碗　井戸脇鹽筍形　替　一入作黑銘若葉

蓋置　染附石疊模様　菓子器　砂張青海盆　干菓子　紅、白七寶

四

櫻川茶寮廣間茶具の中、井戸脇鹽筍形茶碗は、白地に鼠色浸みがあつて、薄作で無疵で一種の珍器であつたが、箱蓋は大德寺前住無學和尙が『御裳の川波たゝむ氷かな』として『牧翁の句を取つて以て銘す』と書附けたのは此茶碗の白釉を氷と見立てた者であらう、此白茶碗に配するに一入作で啐啄齋が若葉と命名した黑茶碗を以てし、更に溜塗の盛阿彌作竹中次茶入を取合せたのは、色彩の配合上如何にも注意周到であつた、而して此盛阿彌竹中次は、後來有名なる藤村庸軒の竹中次などの摸本と爲つた者で、庸軒のよりは一廻り大振で、時代が古いだけ一段重も〳〵しく見受けられた、雜器の方では染附石疊模様蓋置が珍器で、砂張青海盆も中形で美事なり、當世流行の冠手火入一對を手附煙草盆に備へられたのは、大に大盡風の豪勢を示された、斯くて薄茶は故大久保北隱宗匠の長男が代點されたが、此人は近頃安田銀行勤務を辭し、江戸千家宗匠と爲られたさうで、東都に宗匠拂底の折柄、北隱老宗匠の正系相續者が出來たのは誠に悅ばしい事である。

扨て今回の口切は別に名物茶器が現はれた譯でもなく、近年馬翁が催された茶會中では寧ろ手輕い方であるが、始中終道具が又なく巧妙に組合されたので、例へば輕舟に棹さして絕景の山川を下るが如く、如何にもサラ〳〵として、然も一曲毎に眼界變幻して極めて趣味多い茶會であつた、聞けば今回は珍らしくも後藤市長が當茶寮の

茶客と爲られたさうだが、一年程以前余は或る處で市長に面會した時、談偶〻茶事に及び、市長が僕は馬越に僕を茶に呼べと言つたが、未だ呼んで呉ぬのは僕が本氣でないと思つてだらうと言はれたから、余は閣下が本氣で御出席なさるのなら、早速馬翁に其事を傳言しませうと約束して、其後馬翁に其通り傳へて置いたが、今度愈〻之を實現して市長を案内したのであらう、而して其相客は根津青山、岩原謙庵、山本条太郎など云ふ豪傑揃ひであつたので大層茶席が賑つたさうだが、馬翁の談に、後藤市長は名古屋病院在勤時代に彼の地で多少修得したものらしく、擧措自ら法度に協ひ、急所の挨拶が一々肯綮に中つたのは立派な正客振であつて、是迄蠻爵顔したのは全く猫を被て居たのであらうと云ふ事である、東京市長の茶席入は蓋し前代未聞の事で、馬翁が東都茶壇の寂寞を破て斯る珍客を其茶寮に迎へられたのは、大正十年の歳末を飾るべき盛事であるから、余は之を東都茶史に特筆大書して置かうと思ふ。

辛酉

大正茶道記 終

大正十一年五月二十三日印刷
大正十一年五月二十八日發行

辛酉大正茶道記

定價金五圓也

著者　高橋義雄

發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　風間成五

印刷者　東京市芝區愛宕町三丁目二番地　村橋圭二

東洋印刷株式會社印刷

著作權所有

發行所　東京市神田區錦町一ノ一九　振替口座東京貳八五三三番　電話神田貳四九貳番　慶文堂書店

慶文堂印刷株式會社印刷証

御注意

弊店發行圖書は常に取揃有之候に付地方取次ぎ店にて萬一品切の節は發行元へ御注文被成下度候目錄御入用の節は差上候

エト6×33

慶文堂書店發行

□永代不朽の名著□

高橋箒庵著	東都茶會記第一輯	(全三冊 紙數五百五十一頁 和裝美本)	正價金七圓(品切)
同	同 第二輯	(全一冊 紙數二百頁 和裝美本)	正價金貳圓 送料十二錢
同	同 第三輯	(全二冊 紙數四百九十一頁 和裝美本)	正價金五圓五拾錢 送料十八錢
同	同 第四輯	(全二冊 紙數五百五十餘頁 和裝美本)	正價金五圓五拾錢(品切)
同	同 第五輯	(全二冊 紙數四百八十餘頁 和裝美本)	正價金五圓五拾錢 送料十八錢
同	同 第六輯	(全一冊 紙數三百廿頁 和裝美本)	正價金參圓 送料十二錢
同	同 第七輯	(全二冊 紙數四百五十四頁 和裝美本)	正價金六圓 送料十八錢
同	大正庚申茶道記	(全二冊 紙數三百八十頁 和裝美本)	正價金五圓八拾錢 送料十八錢
同	水戸學	(全一冊 菊判洋裝美本 紙數百六十四頁)	正價金壹圓拾錢 送料十錢
同	我樂多籠	(全一冊 四六判洋裝 紙數五百廿頁)	正價金壹圓八拾錢 送料十八錢
同	へそ茶	(全一冊 四六判美本 紙數百四十頁)	正價金五拾錢 送料八錢
松平家編輯部	松平不味傳	(全一冊 菊判洋裝 紙數八百餘頁)	正價金六圓五拾錢 送料二十四錢
藤川淡水著	教訓日本お伽噺	(全一冊 四六判美本 紙數六百二十頁)	正價金壹圓五拾錢 送料十二錢
同	淡水教訓お伽噺	(全一冊 四六判美本 紙數三百餘頁)	正價金壹圓五拾錢 送料十二錢